

## 『大島筆記』に見る 18 世紀半ばの琉球語

橋尾直和

## 1. はじめに

『大島筆記』は、宝歴12年(1762)4月26日(旧暦)、薩摩へ向かう途中、暴風雨に遭い、土佐の国大島浦に漂着した、琉球の使者を乗せた楫船の頭役である潮平親雲上しびらばいみんと土佐藩の若い儒学者戸部良熙とべよしひろが、聴取に際して互いに親交を深め合うことで生まれた記録で、当時の琉球の国内、中国の様子などが細かく聞き取られている。この古文書の近世期の琉球理解に果たした役割は大きい。

「国体」「人物」「風俗」「年中行事」「官位」「朝服」「地名」「産物」「言語(琉球語)」「歌」等を調査し記されている。戸部良熙が記述した琉球語の記述方法としては、漢字に読み仮名(ルビ)を振って表記するタイプ(「提示語」:勢理客)と提示語を示して読み仮名を表記するタイプ(「～(提示語)ヲカタカナ(読み仮名)」:只今ヲ ナマ)の二通りが見られる。

本稿は、漢字と読み仮名の関係に留意しつつ、『大島筆記』の著された時代と近い文献の記述と比較・考察し、18世紀半ばの琉球語の音声・音韻、語彙の実態を明らかにすることを目的としている。

## 2. 先行研究

『大島筆記』に現れる琉球語が整理された資料としては、伊波(2001)がある。この資料は、『日本庶民生活史料集成』第1巻<sup>(1)</sup>に収められている『大島筆記』に見られる琉球語を抽出し、整理したものである。琉球の地名も琉球語として取り扱っている。しかし、あくまでインデックスであって、語彙についての考察は見られない。『大島筆記』に記された琉球語の言語学的考察がなされた先行研究は、筆者が調べた限りでは皆無である。

伊波(2001)では、「必ずしも琉球語とは言えないかも知れないが、研究の便宜のため暫定的に見出し語に入れておく」として掲載された語彙が、五十音順に整理されており、その語彙数は765語にもなる。

伊波(2001)が採用した『大島筆記』の翻刻は、正確には『日本庶民生活史料集成 探検・紀行・地誌(南島篇)』第1巻(比嘉春潮ら編1968)に収録されたもので、元は戦前に新村出氏によって行われた翻刻が『海表叢書』第3巻(1928)、『南蛮紅毛史料』第1輯(1930)に収められていたものである。これを「新村本」と呼ぶことにする。

ここでは、船員名や地名などの提示語である漢字に、読み仮名(ルビ)を平仮名もしくは片仮名で振っている。たとえば、人物では「潮平親雲上しびらばいみん」、地名では「赤平アカヒラ」などである<sup>(2)</sup>。

この他、伊波普猷文庫に所収の『大島筆記 全』(琉球大学附属図書館デジタルアーカイブ・琉球大学学術リポジトリ)などがあり、容易に閲覧することが可能である。ここに掲げられている琉球語の読み仮名は、すべて片仮名表記である。これを「伊波本」と呼ぶことにする。

本稿では、国会図書館蔵の『大島筆記』と善本である山内文庫本と内閣文庫本とを対校した翻刻を底本として採用する。これを「国会図書館本」とする<sup>(3)</sup>。

「国会図書館本」「伊波本」「新村本」の三者を比較してみると、次の点で相違が見られる。

「地名」の項目において「東境」の「境」のルビが、「国会図書館本」で「サカイ」、「伊波本」で「サキ」、「新村本」で「さかい」と記されている点、「目取真」のルビが、「国会図書館本」で「ミトロマ」、「伊波本」で「メトロマ」、「新村本」で「みとろま」と記されている点、「保栄茂」のルビが、「国会図書館本」では「ホエモ」、「伊波本」で「ホエモ」、「新村本」では「こえも」と記されている点（この点に関しては、伊波（2001）において、「こえも（保栄茂、地名、大島357頁）……豊見城間切 ころほ」と修正点を示している）、「南風原」のルビが、「国会図書館本」「伊波本」で「ハ〜ハル」、「新村本」で「はえはる」と記されている点、「琉語大略」の項目において、「南風」のルビが、「国会図書館本」で「ハエ」、「伊波本」で「ハエ」、「新村本」で「はえ」と記されている点、「国会図書館本」「伊波本」で「伝間舟ヲ サバン 唐音也エノモントモ」と記されているのに対して、「新村本」では「えのみん」と記されている点、「国会図書館本」「伊波本」で「脚踏棉ヲ パアツ」と記されているのに対して、「新村本」では「ばあつ」と記述されている点、さらに「官位之事」の項目において、「国会図書館本」では「<sup>キヨホオキ</sup>聞得大君」のようにすべて片仮名でルビが振られているのに対し、「伊波本」ではルビが振られておらず、「新村本」では「<sup>キヨホ</sup>聞得大君」のように「きこえ」のみが平仮名でルビを振られている点など、数カ所にわたっている。

伊波（2001）で採用された「新村本」は平仮名で五十音順に整理された資料であり、インデックスとして活用するには、大変有り難い貴重な資料である。しかし、原本のルビが片仮名表記であるにも関わらず、平仮名表記に変更している語も見受けられる。そこで本稿では、「国会図書館本」のようにすべて片仮名表記で統一する。これらの諸点に注意しながら、先行研究を参考に、原本に直接当たって考察していきたい。なお、他の文献と比較する際には、『大島筆記』の発行年が不詳のため、『大島筆記』（1762 ごろ）と表すことにする。

### 3. 『大島筆記』の記述から見えてくるもの

石崎（2015a : 306）では、16世紀から20世紀にかけて文献に見られる琉球語の言語変化について、「ハ行音」「ニとネの統合」「口蓋化」「キとチの統合」「三母音化」「長音化」の視点で考察を行っている<sup>(4)</sup>。筆者も、この視点に従って、『大島筆記』の記述内容を考察することにする。ただし、「口蓋化」と「キとチの統合」については、「口蓋化・破擦音化」としてまとめて扱うことにする。

潮平の家譜は不明であるが、『大島筆記』の「上・琉人漂着次第」には、潮平に関する情報が記されている。それによると、潮平は漂着当時53歳。「年齢ヨリハ余程更テ見エシ」とある。「下・雑話上」に「潮平先祖ハ浦添ノ出ニテ官ハ<sup>サス</sup>鎖ヲ勤タリ」とある。その後、乱があつて「農民ニ落居」したが、「慶長十六年薩摩黄門様」の「帳箱ナト荷フ夫役」の時に「黄門様」の目にとまり家筋を尋ねられて「本ノ官ニ復スルノ命有テ今ニ至マテ代々親方親雲上ヲ勤メ申スト云ヘリ」という。「<sup>サス</sup>鎖」は御鎖之側のことで、三司官に次いで表十五人衆といわれる王府の中樞を担う役職のメンバーで、「外国通用ノ事ヲ司ル太夫」とあるように「外国行き船舶の点検・在番奉行との交渉・外国船渡来時の接待などの外交に関すること」などを担当する役職である。唐名は翁士連、名乗りは<sup>モリシギ</sup>盛成、「若年ニテ親ニ離レ十

一人兄弟ナリシ若年ヨリ役方ヲ受ケ、奉公を重ねて兼城間切潮平に三十石の地頭地を持ち、首里赤平に住まいがあったとある。男子三人、女子二人の子があり、長男は潮平里之子親雲上、次男は豊村親雲上（「同宗ノ家ヲ継セ」たとある）、三男が潮平子（漂着船に同乗していた）で唐名は翁文秀、名乗りは盛布<sup>モリシブ</sup>、女子の一人は既に嫁いでいるとある。

『大島筆記』のインフォーマントである潮平親雲上は、祖先は浦添出身であるが、住まいは首里の赤平であり<sup>(5)</sup>、「尊円城間」に繋がる家系であり、首里土族であること、聞き取りの対象になったその他の乗組員も、首里や那覇の者が多いことから、離島の方言は話さなかったと考えられる。本稿では、戸部良熙に語った潮平親雲上の言語は、首里方言に近い標準語であることを前提に考察を行うことにする。

### 3. 1 言語変化

#### 3. 1. 1 ハ行音

石崎 (2015a) によれば、申叔舟『海東諸国記』の「語音翻訳」(1501)、陳侃・高澄編『使琉球録』の「夷語」(1535)におけるハ行音の音価は[p]であったことが推定されている。『おもろさうし』(巻1: 1531、巻2: 1613、巻3: 1623)と『混効験集』(1711)は、基本的に仮名で書かれているため、音価が[p]、[ɸ]、[h]のいずれかは把握できない。『大島筆記』(1762 ごろ)のハ行音を考察する際には、近い時代に刊行された、『中山伝信録』(1721)、『琉球入学見聞録』(1764)、『琉球訳』(1800)におけるハ行音の音価を把握しておく必要がある。

『中山伝信録』(1721)では、ハ行ア段音、ウ段音、エ段音、オ段音で[p]が弱体化して、破裂音ではなくなっている状況が確認される。しかし、ハ行イ段音の一部の語彙で[p]を保っていた、と見るのが穏当である。ハ行音の音価については、基礎方言を蘇州語と想定すると、多くは[ɸ]であり、[h]ではなかったと思われる。そして、カ行ア段音の一部が喉音化する現象は、ハ行音が[ɸ]であったことを裏付けるものと思われる。一方で、「葉」と「齒」は両唇摩擦音と軟口蓋音として区別されている。語中・語尾のハ行音は、一部で[ɸ]といった発音が見られるが、ワ行音に変化している語も見られる。すなわち、ハ行転呼音の現象が見られる<sup>(6)</sup>。

『琉球入学見聞録』(1764)の「字母」では、ハ行音を[ɸ]で表しており、「土音」においても概ね同じ傾向がみられる。ただ、一部の語に関しては、慣用的に[p]で読む語が残存していたことが分かる。一方、語中・語尾に関しては、語によって状況が大きく異なり、子音の[ɸ]と半母音の[w]と、それらが脱落して長母音になった形が確認される。また、カ行ア段音に由来する語が、喉音の[ha]で記述される例が、比較的多数見られる。この現象は、『おもろさうし』、『中山伝信録』、『クリフォード琉球語彙』にも見られ、さらに沖縄北部方言や久高島方言でもみられる。これらが『おもろさうし』にも見られることと、さらに琉球方からの官生が多くは首里出身であったことを考え合わせると、首里の言葉にもこの現象があったことを物語る<sup>(7)</sup>。

『琉球訳』(1800)では、ハ行ア段音の「ハ」については「法」が使われていることから[ɸ]に近いものだったと考えられる。ハ行イ段音の「ヒ」については「許」を用いているが実際には[h]ではなく[c]に近い発音の漢字を選んだ可能性もある。ハ行ウ段音の「フ」とオ段音の「ホ」が「父」で表され同

音で「フ」になっている。しかし、音訳漢字の「福」は主に「フ」に用いられ、「ホ」に用いられることは稀である。これは両唇摩擦音の[ɸ]を表すと思われる。語中・語尾のハ行を示す「大門」「多」「祖」で、両唇摩擦音の[ɸ]を表す「甫」「火」が使われている。また、「かわ」や「かわら」を表す項目では、[kawa]、[kawara]となっており、現代首里方言のような[w]が脱落して長音になっている状況は見られない。これは、「語音翻訳」や『琉球入学見聞録』で「瓦」が[kara] <sup>(8)</sup>と[w]が脱落していた状況とは異なる <sup>(9)</sup>。

これらの成果を『大島筆記』(1762 ごろ)に照らし合わせてみるならば、語頭のハ行音については、漢字の読みが仮名表記でしかないため、音価が[p]、[ɸ]、[h]のいずれかは把握できない。しかし、語中・語尾のハ行音については、ハ行転呼音を示している可能性のある語とそうでない語を比較することによって、[ɸ]と[w]の間でゆれが生じていることが推定される。

語例を挙げれば、次のとおりである(音声記号は推定音価)。

ハ行ア段音：安波根<sup>アハネ</sup>[ʔaɸane]・山川<sup>ヤマカハ</sup>[jamakaɸa]

ハ行エ段音：前城<sup>マヘグスク</sup>[maɸegusuku]・浦添<sup>ウラソヘ</sup>[ʔurasoɸe]

ハ行オ段音：大城<sup>ウホグスク</sup>[ʔuɸogusuku]／大城<sup>ウラグスク</sup>[ʔuwogusuku]／大島<sup>ヲシマ</sup>[wowoɸima]・儀保<sup>キホ</sup>[giɸo]

ハ行オ段音における「大」の二音節目が、「ホ」[ɸo]と「ヲ」[wo]とでゆれが生じていることが分かる。ちなみに、大島の「ヲ」<sup>マ</sup>とあるのは、「ウヲ」[ʔuwo]の「ウ」が「ヲ」によって、逆行同化を起こしたと考えられる。

これらのことから、ハ行音の音価は、[p]の段階ではなく[ɸ]であり、[h]にはまだ変化していないことが推定される。

### 3. 1. 2 ニとネの統合

『大島筆記』(1762 ごろ)に掲げられている琉球語において、ニとネの統合は確認されなかった。語例を挙げれば、次のとおりである(音声記号は推定音価)。

「ニ」語頭：苦竹<sup>ニガタケ</sup>[nigatake]、西平<sup>ニシヒラ</sup>[nifibira]、語中・語尾：安仁屋<sup>アニヤ</sup>[anija]、野国<sup>ノクニ</sup>[noguni]

「ネ」語頭：根波<sup>ネハ</sup>[neha]、根路銘<sup>ネロメイ</sup>[neromei]、語中・語尾：知念<sup>チネン</sup>[ʃinen]、与那嶺<sup>ヨナミネ</sup>[jonamine]

### 3. 1. 3 口蓋化・破擦音化

琉球語の口蓋化の指標として、イ母音[i]の影響が考えられる。語頭にイ母音が見れる音環境と語中・語尾にイ母音が見れる音環境とに分けて整理して考察する。それぞれの音環境ごとに、語例を挙げれば、次のとおりである(音声記号は推定音価)。

/i—/

伊喜間<sup>イキマ</sup>[ʔikima]、伊計<sup>イケ</sup>[ʔike:]、伊佐<sup>イサ</sup>[ʔisa]、板良敷<sup>イタランキ</sup>[ʔitarafiki]、伊豆味<sup>イツミ</sup>[ʔitsumi]、糸数<sup>イトカズ</sup>[ʔitokazu]、稲福<sup>イナフク</sup>[ʔinaɸuku]、今帰仁<sup>イマキン</sup>[ʔimakin]

/—ik V/ (Vは母音)

鬼界<sup>キカイ</sup>[kikai]、具志堅<sup>グシケン</sup>[guɸikin]、聞得(大君)<sup>キコエ</sup>[kikoe]

／-ig V／ (Vは母音)

伊差川<sup>イサシガハ</sup> (親雲上) [ʔisafigaɸa]、直眼紙<sup>チキゲンシ</sup> [dzikigenʃi]

／-it V／ (Vは母音)

痛, アイタ<sup>ʔaita</sup>、香ノモノ, コジツ<sup>[kodzitsu]</sup> (故実ト書)

／-id V／ (Vは母音)

思徳<sup>ワイドコ</sup> [woidoko] (男子幼名)、思戸<sup>ワイドウ</sup> [woido:]

次に、語頭のキ・ギと語中・語尾のキ・ギが破擦音化しているかを考察する。

「キ」語頭: 喜名<sup>キナ</sup>・喜納<sup>キナ</sup> [kina]、語中・語尾: 垣花<sup>カキハナ</sup> [kakiɸana]、牧港<sup>マキナト</sup> [makinato]、新垣<sup>アラガキ</sup> [ʔaragaki]

「ギ」語頭: 儀保<sup>ギホ</sup> [giɸo]、儀間<sup>ギマ</sup> [gima]、語中・語尾: 大宜見<sup>ワキミ</sup> [wogimi]、屋直<sup>ヤキ</sup> [jagi]

これらのことから、『大島筆記』(1762 ごろ)に掲げられた語彙においては、口蓋化とキ(ギ)からチ(ヂ)への破擦音化はまだ定着していないことが推定できる。ただし、下記のものに例外が見られた。次に掲げておく。

飯ヲ上レヲ…… (中略) 下ノ詞チモノカメ

これは、「来て物噛め」と解釈されるので、「キテ」[kite]の「キ」[ki]が「チ」[ʃi]となっている。

甘蔗ヲ……ヲヂ又ヲギ

この例は、さとうきびの発音が[wodʒi]のヂ[dʒi]と[wogji]の[gi]の間でゆれていることを物語っている。その他、「只今ヲ ナマ」とあるが、この「ナマ」の語源を「イマンマ (今の間)」と見なし、イ母音による「マ」の子音[m]の口蓋化が生じたものと解釈しなければならぬ語彙もある(これについては、後述する)。

### 3. 1. 4 三母音化

石崎 (2015a) により、『大島筆記』(1762 ごろ)と近い時代に刊行された、『中山伝信録』(1721)、『琉球入学見聞録』(1764)、『琉球訳』(1800)における単音の音価を把握しておきたい。

『中山伝信録』(1721)の「字母」は全ての仮名に対する音訳漢字がそれぞれ異なり、さらに蘇州語での発音も異なることから、五つの短母音は使い分けられていることになる。しかし、「琉語」はエ段音が狭母音化してイ段音に合流していたことが音訳漢字の使用状況から垣間見られる。また、オ段音も狭母音化してウ段音と合流していた可能性が高い<sup>(10)</sup>。

『琉球入学見聞録』(1764)の短母音においては、子音によってエ段音とイ段音が書き分けられているものと、書き分けられていないものがある。オ段音とウ段音に関しては、エ段とイ段に比べて同じ音訳漢字で表現される用例が多く見られるため、合流していたと考えられる<sup>(11)</sup>。

『琉球訳』(1800)のイ段とエ段では、「以」や「一」が共通して用いられ、ウ段とオ段では同じ音訳字「武」「屋」が使用されている。これによりア行においては、基本母音が三母音化を完了した姿を、音訳漢字が反映している状況が看取される。なおマ行、ナ行はエ段とイ段で音訳漢字を棲み分ける傾向が見られる<sup>(12)</sup>。

『大島筆記』(1762 ごろ)では、総じて、エ段音由来のものが、語頭、語中・語尾において、エ段音

の語彙の読み仮名となって現れることが多いため、概ね音価はイ段音は[i]、エ段音は[e]と推定できるが、一部エ段音の[e]がイ段音の[i]と統合している例も見受けられる。

語例を挙げれば、次のとおりである（音声記号は推定音価）。

語頭：永良部[<sup>イ</sup>らぶ]、語中・語尾：真栄田[<sup>マ</sup>いづ]、末吉[<sup>ス</sup>ウジ]、古壑[<sup>フル</sup>キン]、勢理客[<sup>ジ</sup>リキヤク]（一方、安勢理[<sup>ア</sup>サセリ]では「勢」の読みが「セ」で、母音はiではなくeになっている）

オ段音由来のものとう段音の語彙の読み仮名の場合にも、同様のことが言える。概ね、音価はウ段音は[u]、オ段音は[o]と推定できるが、一部オ段音の[o]がウ段音の[u]と統合している例も見受けられる。

語例を挙げれば、次のとおりである（音声記号は推定音価）。

語頭：御神[<sup>ウ</sup>カミ]、大湾[<sup>ウ</sup>ワン]、大城[<sup>ウ</sup>ホグスグ]、語中・語尾：東風平[<sup>ウ</sup>チヒラ]

これらのことから、『大島筆記』（1762 ごろ）の時代は、三母音化が未完了であったことが推定される。しかし、少しずつではあるが三母音化が進行していることが考えられる。

### 3.1.5 長音化

石崎（2015a）により、『大島筆記』（1762 ごろ）と近い時代に刊行された、『中山伝信録』（1721）、『琉球入学見聞録』（1764）、『琉球訳』（1800）における長音の音価を把握しておきたい。

『中山伝信録』（1721）の長音に関しては、ア段音の用例はないが、その他のイ段、ウ段、エ段、オ段は連母音に近い音価を有し、一部は長母音化したと思われる。とりわけ一音節に由来する「木」「籬」「櫓」は長母音化している状況が見られることが特徴的である。『中山伝信録』よりも前に成立している『おもろさうし』も、「気」に対して「けい」、「世」に対して「よう」など、すでに一音節由来の語が長母音化する傾向が見られるため、『中山伝信録』の時代にこの現象が確認されることはさほど不自然ではない。

そしてエイに由来する母音がイ段長音に、アイに由来する母音がエ段長音になっていたと考えられる。開音の 아우 と合音の 오우 に由来する連母音も、『使琉球録』同様に使い分けられていたと考えられる<sup>(13)</sup>。

『琉球入学見聞録』（1764）の開音と合音に由来する長音については、使用される音訳漢字がそれぞれ異なっているなどの理由から、使い分けの意図が見られる。そして、連母音の長音化については、アイについては一部が長音化し、一部が連母音のままという状況ともとれる。だが、開音の 아우 には長母音化した状況が見られる<sup>(14)</sup>。

『琉球訳』（1800）のア行長音を示す例において、「訳音」「訳訓」ともオ段長音を示す「我」の音訳漢字を使用している。「鳳凰」の「凰」の発音は現代首里方言から考察すると、[o:]<sup>(15)</sup>であったと考えられる。ただ、エ段長音と思しき用例「永祿」が短母音にも用いられる音訳漢字「一」を使用していることから、他の長母音については十分に弁別されているとはいいがたいものもある。だが、総じて長母音においては、「昨日」の例にみるように、中古音や南方官話でも二重母音をもつ音訳漢字が選ばれる傾向がある<sup>(16)</sup>。

『大島筆記』(1762 ごろ)に掲げられている語彙の振り仮名に、連母音が確認されることは、すなわち長音化が進行していないことを意味する。次に語例を掲げておく(音声記号は推定音価)。

/ a a /

<sup>ツア</sup>ニ[?ta:]、脚踏棉、パアツ[pa:tsu]、疼、ヤアキル[ja:wiru]、猫、マヤア[maja:]

/ a i /

痛、アイタ[?aita]、<sup>キカイ</sup>鬼界[kikai]、小用、シバイ[[ibai]

/ a u /

<sup>イワウサン</sup>硫黄[?iwo:san]、<sup>カウキ</sup>幸喜[ko:ki]

アウは長母音化して広めのオの長音[o:]であったと推定される。オウ由来の[o:]と区別されていた可能性が高い。

/ a e /

<sup>クハエ</sup>桑江[kuφae]、<sup>タカエス</sup>高江洲[takaesu]、<sup>マエザト</sup>真栄里[maezato]

/ a o /、 / i a /については用例見当たらず。

/ i i /

<sup>ヒイ</sup>一[çi:]、<sup>ミイ</sup>三[mi:]

/ i u /

蕨、ニウナ[niuna]、ランチウ[rangiu]

/ i e /

<sup>イエ</sup>伊江[?ie]、<sup>カミエス</sup>上江洲[kamiesu]

/ i o /については用例見当たらず。

/ u i /

<sup>クイカヒ</sup>杭牙[kuikaφi]

/ u e /、 / u a /については用例見当たらず。

/ u u /

<sup>ツウズ</sup>通事[tsu:dzu]、<sup>メンツウ</sup>綿紙[mentsu:]

/ u o /については用例見当たらず。

/ e a /

<sup>ヘアンナ</sup>平安名[heanna]

/ e i /

水、オベイ[?obei]、<sup>テイマ</sup>汀間[teima]

/ e u /

自分の父、セウ[seu]、<sup>ネウハ</sup>饒波[neufa]

/ e e /、 / e o /、 / o a /については用例見当たらず。

/ o i /

女, オイナゴ[?oinago]、<sup>ホイトンクヘン</sup> 会同館 [hoitongwan]

/ o u /

オウは長音化して狭いオの長音[o:]であったと推定される。アウ由来の[o:]と区別されていた可能性が高い。先述の/a u/の項で示した、<sup>イワウサン</sup> 硫黄山 [iwɔ:san]、<sup>カウキ</sup> 幸喜 [kɔ:ki]と比較してみると、両者が区別されていることが分かる。

弟, オツトウ[otto:]、<sup>トウノクラ</sup> 當蔵 [to:nokura]、<sup>トウロウ</sup> 行燈 [to:ro:]、<sup>トマリチトウ</sup> 泊地頭 [tomaridzito:]、女陰, ホウ[ɸo:]、<sup>ボウトウ</sup> 戊土 [bo:to:]、<sup>マツドク</sup> 松堂 [matsudo:]、木筆花, モウヒツクハ [mo:ɸikkwa]、<sup>ロクトウ</sup> 勒肚 [rokuto:]

/ o e /

<sup>キコエ</sup> 聞得 (大君) <sup>(17)</sup> [kikoe]

/ o o /

(聞得) <sup>オホキミ</sup> 大君 [?o:kimi]

これらのことから、『大島筆記』(1762 ごろ)の時代は、連母音の中でも/a u/アウ・/o u/オウについてのみ長音化していたことが推定される。

#### 4. 語源

##### 4. 1 地名の語源

###### 4. 1. 1 勢理客

狩俣 (2005) では、与論島の与論町立長「リッチョー」が古くは「瀬利覚」と表記されており、浦添市勢理客「ジツチャク」と同系であることを突き止め、さらに、沖永良部島の知名町瀬利覚の方言形が「ジツキョ」と発音されていたことを確認し、その他、今帰仁村勢理客「ジツチャフ」、伊是名島勢理客「ジツチャク」の語形を比較して、祖形を「ゼリカコ zericako」としている。そして、この出発形からの変化を、次のように推定している<sup>(18)</sup>。

ゼリカコ>ゼリカク>ゼリキヤク>ゼリキヤフ>ジリキョホ>ジツキョ

>ディリキョー>リリチョー>リッチョー

多和田 (2012) では、出発系をゼリカクとし、16世紀から現代までの文献に現れる音を比較し、推定音価を導き出し、次のように言語変化を推定している<sup>(19)</sup>。

(15世紀以前) \* /zerikaku / [dzerikaku]

↓

(1500年前後) /ziQkjaku / [dzikkjaku]

↓

(18世紀後半~19世紀初め) /ziQCjaku / [dzittjaku]

↓

(19世紀半ば~現代) /zji QCjaku / [dzittjaku]

ここで、『大島筆記』(1762 ごろ)の「地名」の記述を確認してみると、<sup>ジリキヤク</sup> 勢理客のように振り仮名が「ジリキヤク」となっている。



先の狩俣 (2005) では、出発形のゼリカコからジツキョへの変化は説明されているが、沖永良部島の知名町瀬利覚「ジツキョ」と与論島の与論町立長「リツチョー」の説明どまりとなっており、浦添市勢理客「ジツチャク」、今帰仁村勢理客「ジツチャフ」、伊是名島勢理客「ジツチャク」についてきちんと説明がなされていない。そこで、『大島筆記』の勢理客「ジリキヤク」の段階を参照すると、次の変化が推定される<sup>(20)</sup>。

ゼリカコ>ゼリカク>ゼリキヤク>ジリキヤク>ジリチャク>ジツチャク>ジツチャフ

多和田 (2012) では、18 世紀後半～19 世紀初めは、/ziQCjaku/[dzittfaku]の段階であるとしているが、少なくとも『大島筆記』の段階ではまだ、ゼリキヤク>ジリキヤクへと変化を遂げた段階であると推定される。ただし、語頭の母音が中舌母音かどうかは、記述から推定することは難しい。

#### 4. 1. 2 保栄茂

石崎 (2015b) に、地名「保栄茂」の名称の変化について、次の記述が見られる<sup>(21)</sup>。

つまり「語音翻訳」と『おもろさうし』の間に「ポエモ」から「ボエム」に変化した、あるいは「語音翻訳」当時からすでに「ポエモ」で、『おもろさうし』の時代に「ボエム」になったと思われる。

その後、琉球語は母音に変化が起こる。『中山伝信録』や『琉球入学見聞録』など 18 世紀の資料で連母音 (二つの母音が連続する音) が長母音 (伸ばす母音) になる例が観られるのである。したがって 17 世紀の「ボエム」[boemu]のなかの、「オエ」[oe]という連母音が「ウィー」[wi:]<sup>(22)</sup> という長母音になっていたものと考えられる。これは「声」[koe]が「クイー」[kwi:]<sup>(23)</sup> と発音されるのと同じ現象である。よって、当時の発音体系に照らせば、このころには「ビーム」となっていたものと推定される。

1800 年の資料『琉球訳』という中国語資料においては、「保栄茂」が「兵」と書かれている。「兵」を南京官話 (中国語) で読むと「ピン」[pin]<sup>(24)</sup> になる。中国語の[pin]と[pin]の発音を比較すると、[pin]の方が聴覚的印象では長いので、ここで[pin]にあたる発音の漢字を選んでいないところを見ると、当時は「ピン」ではなく、長音の「ビーン」という発音だったと思われる。つまり 18 世紀に「ビーム」から「ビーム」に変化したのだが、ここには「上原」の「ウエ」が「イー」になるのと同じ母音の変化と、末尾の母音が脱落して「ン」になる変化があったと思われる。そして、『琉球訳』の時代までに「ビーン」と表記され、その後に「ビーン」の長母音が短母音化して「ピン」になったと考えられる。

そして、次のような言語変化を推定している<sup>(25)</sup>。

ポエモ>ボエモ>ボエム>ビーム>ビーム>ピン

ここで、『大島筆記』(1762 ごろ) の「地名」の記述を確認してみると、保栄茂と振り仮名が「ホエモ」と書かれている。語頭のルビは清音「ホ」であっても濁音「ボ」の場合も考えられるので、発音は「ポエモ」[boemo]だった可能性が高い。

先の石崎 (2015b) では、16 世紀の「語音翻訳」の時代で「ポエモ」、17 世紀には「ボエム」、18 世

紀には「ブイム」「ビーム」へと変化したと推定している。しかし、18世紀後半の『大島筆記』においては、三母音化の完了は確認できない。また、16世紀の「語音翻訳」の時代と同じ発音の「ボエモ」[boemo]と推定される。

多和田 (2012) においては、「ボエモ」を出発形と捉え、次のような変化を推定している<sup>(26)</sup>。

\* /boemo/ [boemo] > /buimu/ [buimu] > /būin/ [buiŋ] > /bīin/ [biŋ] > /bii N/ [biːŋ]  
> /bin/ [biŋ]

ここでは「ボエモ」[boemo]が出発形と推定されている。18世紀半ばの『大島筆記』の「ボエモ」[boemo]の段階が、語形変化の過程において、初期段階のままであったことになる。

#### 4. 1. 3 波平

石崎 (2015b) に、地名「波平」の名称の変化について、次の記述が見られる<sup>(27)</sup>。

地名「波平」のもともとの読み方は「ハピラ」系の読み方に由来する。『海東諸国紀』「語音翻訳」の音声体系に照らすと、ハ行は[p]音なので「パピラ」という発音になるが、『絵図郷村帳』(1649年)では「はびら村」とあり、『おもろさうし』(巻20の1335・1336)では「はひら」と表記されている。当時の仮名表記では半濁音を表記できず、濁点もしばしば省略されるため、17世紀では「パピラ」か「ファピラ」のいずれかであったと考えられる。

その後、『中山伝信録』(1721)までには首里では[p]音が[ɸ]音に変化していたので、「ファピラ」になったと考えられる。

この漢語資料には、琉球語の「にんにく」を表す提示後「蒜(フィル)」に対し「非徒(フィドゥ)」という漢字を当てており、この当時に「ル」の[r]音が[d]音に変化して「ドゥ」になる現象が観られる。よって「ファピラ」が「ファビダ」という過程を経て、狩俣氏が指摘する破擦音化発生し、「ファビジャ」になったものと思われる。

ちなみに「油(アブラ)」が「アンダ」になるケースをみると、「油」の語は『混効験集』(1702～1711年)で「アムダ」と記され、『中山伝信録』(1721年)では「阿唔打」と書かれる。つまり18世紀初頭ではすでに「アンダ」の語形が完成していた。このことを考えると、「ファビジャ」の「ビ」が「ン」に変化して「ファンジャ」となる状況は18世紀までに完成していたと推測される。

そして『琉球訳』(1800年)で「波平」が「含日阿」と書かれる。このころまでには音節冒頭の「ファ」が「ハ」に変化し、「ファンジャ」が「ハンジャ」に変化していたものと思われる。よって18世紀に「波平」の読み方が「ハンジャ」に定まったものと思われる。

これらのことから、石崎 (2015b) では、「波平」の地名の呼称の変化として、次の仮説1と仮説2とを提示している<sup>(28)</sup>。

仮説1: パピラ>パピラ>ファピラ>ファビダ>ファビジャ>ファンジャ>ハンジャ

仮説2: パピラ>ファピラ>ファビダ>ファビジャ>ファンジャ>ハンジャ

ここで、『大島筆記』(1762ごろ)の「地名」の記述を確認してみると、読谷山間切の地名に 波平<sup>ハピラ</sup>

「ハヒラ」とある。これは、先の18世紀初頭の『中山伝信録』にみられる「ファビラ」[ɸabira]と同音ということになる。だとすると、18世紀後半まで変化がなかったことになる。少なくとも『大島筆記』の記述に従えば、「ファビダ」への変化は確認されない。

#### 4.2 動物名の語源

##### 豚

『大島筆記』(1762 ごろ)では、「豚ヲ……ヲハ」と記述している。この記述から当時、「豚」を[wɔɸa]/[wɔɸa]あるいは[wowa]と発音していたことが推定できる。現代首里方言では、「豚」を[ʔwa:]と発音する。これらのことを参照して、「豚」の語源を考察してみる。

崎山(2001)によれば、「豚」と同源の「亥」は、オーストロネシア祖語\**babuj*から派生したマレー・ポリネシア語派\**babuj*の西部マレーポリネシア語群\**babuj*「猪」と比較できる。崎山氏は、古代日本語「亥」への言語変化を、次の様に解釈している<sup>(29)</sup>。

\**babuj* > \**bui* > \**wai* > *wi:*

I    II    III    IV

IからIIでは、第一音節の*ba*が脱落し、*buj*となり、*j*が*i*へと変化した。

IIからIIIでは、*b*が*w*、*u*が*ə*へと変化した。

IIIからIVでは、*ə*が語末の*i*の逆行同化により*i*の長音へと変化した。

ところで、現代首里方言では[ʔwa:]であるが、この語の語源解釈については、『大島筆記』における「ヲハ」の記述が参考になる。

オーストロネシア祖語\**babuj*から派生したマレー・ポリネシア語派\**babuj*のフィリピン諸語\**babuj*からさらに派生した中央フィリピン諸語のタガログ語、ヴィサヤ諸語のセブアノ語、中央ヴィサヤ諸語のヒリガイノン語、北ルソン諸語のイリカノ語また台湾諸語から派生したパイワン語群のサイシャット語の「豚」が*baboj*である<sup>(30)</sup>。

筆者は、この*baboj*こそが、現代首里方言[ʔwa:]の出発形であると考え。次に、言語変化を推定する。

\**babuj* > *baboj* > \**bobaj* > \**boba* > *wɔɸa* > *wowa* > *wuwa* > ʔ*wa:*

I    II    III    IV    V    VI    VII    VIII

IからIIでは、第一音節の広母音*a*が第二音節の*u*に異化作用し、*o*へ変化した。

IIからIIIでは、第一音節と第二音節のメタテーゼ(音位転換)が起こった。

IIIからIVでは、語末の*j*の脱落が起こった。

IVからVでは、*b*の唇音化が起こり、語中の破裂音の摩擦化が起こった。

VからVIでは、語中の唇音化(いわゆるバ行転呼音)が起こった。『大島筆記』の時代は、この段階であると推定する。

VIからVIIでは、母音の狭母音化が起こった。

VIIからVIIIでは、第一音節の脱落が起こり、その代替として[ʔ]へ変化し、母音の長音化が起こった。

#### 4. 3 時を表す語の語源

今

『大島筆記』(1762 ごろ)では、「只今ヲ ナマ」と記述しているが、現代首里方言も同様の「ナマ」[nama]であるので、この時代と変化がないことになる。

平山・大島・中本(1966)によれば、「今」の琉球語の方言系は、次のとおりである<sup>(31)</sup>。

名瀬(奄美) [ʔnama]、古仁屋(〃) [nama]、亀津(徳之島) [ʔna:]、志戸桶(喜界島) [nama]、茶花(与論島) [nama]、辺土名(沖縄北部) [namma]、伊江島(沖縄北部) [ʔnamma]、奥武(沖縄南部) [nama]、平良(宮古島) [nnama]、池間(宮古群島) [nnama]、石垣(八重山群島) [nama]、波照間(〃) [mana]

村山(1981)では、この「今 ナマ nama」の語源を再構形\*ʔimammaに求め、それは「今の間」\*ʔimanoma > \*ʔimamma の変化形と見なしている。さらに、この語形から「ナマ」へは、次の語形変化を考える<sup>(32)</sup>。

\*ʔimamma > \*ʔmjamma > ʔnamma > namma > nama

出発形の語頭の[ʔima-]が[ʔmja-]へと変化したと見るならば、イ母音による子音[m]の口蓋化が生じたことになる。したがって、定着はしていないが、少なくとも『大島筆記』(1762 ごろ)の時代には、イ母音による「マ」の子音[m]の口蓋化が生じていることが確認できる<sup>(33)</sup>。

#### 5. おわりに

『大島筆記』(1762 ごろ)と近い時代に刊行された、『中山伝信録』(1721)、『琉球入学見聞録』(1764)、『琉球訳』(1800)の記述と比較することにより、琉球語の言語変化について、「ハ行音」「ニとネの統合」「口蓋化・破擦音化」「三母音化」「長音化」「語源」の視点で考察を行った。その結果得られた知見について、ここでまとめておく。

「ハ行音」については、語頭のハ行音は、漢字の読みが仮名表記でしかないため、音価が[p]、[ɸ]、[h]のいずれかは把握できないが、語中・語尾のハ行音については、ハ行転呼音を示している可能性のある語とそうでない語を比較することによって、[ɸ]と[w]の間でゆれが生じていることが推定される。音価は、[p]の段階ではなく[ɸ]であり、[h]にはまだ変化していないことが推定される。「ニとネの統合」については、確認されなかった。

「口蓋化・破擦音化」については、口蓋化とキ(ギ)からチ(ヂ)への破擦音化はまだ定着していないことが推定される。ただし、一部の語彙については、口蓋化が生じている。

「三母音化」については、三母音化が未完了であったことが推定される。しかし、少しずつではあるが三母音化が進行していることが考えられる。

「長音化」については、掲げられている語彙の振り仮名に連母音が確認される。このことは、すなわち長音化が進行していないことを意味する。

「地名の勢理客の語源」については、ゼリキヤク > ジリキヤクへと変化を遂げた段階であると推定

される。ただし、語頭の母音が中舌母音かどうかは、記述から推定することは難しい。「保栄茂の語源」については、語形変化の過程において、初期の「ボエモ」の段階のままであったことになる。「波平の語源」については、波平「ハヒラ」とあるので、18世紀初頭の『中山伝信録』に見られる「ファビラ」[ɸabira]と同音ということになり、18世紀半ばまで変化がなかったことになる。

「動物名の豚の語源」については、「ヲハ」の記述から、「豚」を[wɔɸa]／[wɔβa]あるいは[wowa]と発音していたことが推定でき、オーストロネシア祖語\**babuj* から派生したマレー・ポリネシア語派\**babuj* のフィリピン諸語\**babuj* からさらに派生した中央フィリピン諸語のタガログ語、ヴィサヤ諸語のセブアノ語、中央ヴィサヤ諸語のヒリガイノン語、北ルソン諸語のイリカノ語また台湾諸語から派生したパイワン語群のサイシャット語の「豚」\**baboj* からの変化形であると推定される。

「時を表す語の今の語源」については、「今の間」\**ɽimanoma* > \**ɽimamma* の変化形と見なすことができ、\**ɽimamma* > \**ɽmjamma* > \**ɽamma* > \**namma* > \**nama* 「ナマ」へと変化したと推定される。出発形の語頭の[ɽima-]が[ɽmja-]へと変化したと見るならば、イ母音による子音[m]の口蓋化が生じたことになる。したがって、定着はしていないが、少なくとも『大島筆記』（1762 ごろ）の時代には、イ母音による「マ」の子音[m]の口蓋化が生じていることが推定される。

今後の課題としては、『大島筆記』以降の漂着資料で、『土佐國群書類従』第7巻、巻82、漂流部6に収められている「下田日記」との比較研究が考えられる。この書は、寛政7年（1795）、土佐の下田浦に漂着した琉球人からの聞き取りをまとめたもので、琉球の言語、薬、地理、官位と役人、役職、武器、和戦と琉球船の違いなど、多岐にわたっている。『大島筆記』とは、30年ほどの隔たりがあるが、18世紀後半の琉球語資料として比較することができる。そこで、『大島筆記』（1762 ごろ）、「下田日記」（1795 ごろ）の推定音・意味と現代首里方言の音声・意味とを比較してみたい。

#### 【注】

- (1) 伊波（2001：126）の「記」に、『日本庶民生活史料集成第9巻』とあるのは、誤りである。「第1巻」が正しい。
- (2) 人物、地名のルビには平仮名、その他の語には片仮名が振られている。
- (3) 「国会図書館本」とは、立正大学文学部教授の島村幸一氏編集による『『大島筆記』にみる琉球船漂着者の「聞書」世界—翻刻と研究—』（2018）に所収予定である、土佐藩の藩校所蔵のものを最良の本とする『大島筆記』の翻刻本のことを指す。
- (4) 石崎（2015a：306-307）に掲げてある表を参照。
- (5) 泉（2009：18）には、「首里赤田の潮平親雲上」とあるが、「首里赤平」の誤りである。
- (6) 石崎（2015a：173）参照。
- (7) 石崎（2015a：177）参照。
- (8) 石崎（2015a：180）では、[kaara]と記述している。
- (9) 石崎（2015a：178-180）参照。
- (10) 石崎（2015a：261）参照。

- (11) 石崎 (2015 a : 265) 参照。
- (12) 石崎 (2015 a : 266) 参照。
- (13) 石崎 (2015 a : 261) 参照。
- (14) 石崎 (2015 a : 265) 参照。
- (15) 石崎 (2015 a : 266) 参照。
- (16) 石崎 (2015 a : 266) 参照。
- (17) 『大島筆記』(「伊波本」: 354) 参照。
- (18) 狩俣 (2007 : 4) 参照。
- (19) 多和田 (2012 : 60) 参照。
- (20) 高橋 (1991 : 522) では、ゼリカク>ゼリキャク>ゼリチャク>ジツチャクと音韻変化したと考えられる、と述べている。
- (21) 石崎 (2015 b : 37-38) 参照。
- (22) 石崎 (2015 b : 37) では、[wii]と記述している。
- (23) 石崎 (2015 b : 38) では、[kwii]と記述している。
- (24) 石崎 (2015 b : 38) では、[pin]を[ping]と記述している。
- (25) 石崎 (2015 b : 39) 参照。
- (26) 多和田 (2012 b : 110) 参照。本稿では、[-ŋ]を[-ŋ̃]に修正している。
- (27) 石崎 (2015 b : 45・47) 参照。
- (28) 石崎 (2015 b : 47) 参照。
- (29) 崎山 (2001 : 471) 「別表 音節縮約と行程アクセントの発生」参照。崎山氏は、再構形を\*babuyと表記しているが、本稿では、\*babujとyをjで表記する。
- (30) 付録：オーストロネシア祖語/babuy (ウィクショナリー日本語版) 参照。
- (31) 平山・大島・中本 (1966 : 285) 参照。
- (32) 村山 (1981 : 63-66) 参照。
- (33) 村山 (1981 : 63) では、「首里方言でiが後続の子音を口蓋化するという「ポリワーノフの法則」によってニヤマ、ニャンマのニヤの前にiがあったことがわかる」と述べている。

#### 【引用・参考文献】

- 池宮正治 (1995) 『琉球古語辞典 混効験集の研究』第一書房
- 石崎博志 (2015a) 『琉球語史研究』好文出版
- 石崎博志 (2015b) 『しまくとぅばの課外授業—琉球語の歴史を眺める—』ボーダーインク
- 泉 賢司 (2009) 「空手道 四大流派について」國土館大學武道道德研究所編『國土館大學武徳紀要』第25号 : 17-31
- 伊波和正 (2001) 『大島筆記』の琉球語」沖縄国際大学外国語学会編『沖縄国際大学外国語研究』第5巻第2号 : 125-149

- 亀井 孝 (1979) 『クリフォード琉球語彙』所収影印本 (勉誠社文庫 71) 勉誠社
- 狩俣繁久 (2005) 「第 6 回 琉球語と地名研究の可能性」『歴史地名通信』(月報) 50 号 平凡社 : 6-11
- 崎山 理 (2001) 「オーストロネシア語族と日本語の系統関係」『国立民族学博物館報告』第 25 巻 : 465-485
- 崎山 理 (2017) 『日本語「形成」論』三省堂
- 島村幸一 (2008) 「土佐漂着の『琉球人』—志田伯親雲上・潮平親雲上・伊良皆親雲上を中心に—」『沖縄文化研究 34』法政大学沖縄文化研究所 : 89-145
- 島村幸一 (2014) 『琉球 交差する歴史と文化』勉誠出版
- 徐 葆光編 (1721) 『中山伝信録』康熙 60 年長洲徐氏二友齋刊本
- 申 叔舟 (1501) 「語音翻訳」『海東諸国記』内閣文庫本
- 高橋俊三 (1991) 『『おもろさうし』と地名』仲松弥秀先生傘寿記念論文集刊行委員会編『神・村・人—琉球弧論叢—』第一書房
- 多和田眞一郎 (2010) 『沖縄語音韻の歴史的研究』溪水社
- 多和田眞一郎 (2012) 『地名で考える沖縄語の移り変わり—例えば「ぜりかく」(勢理客) が「じっちゃく」になるまで—』溪水社
- 陳 侃・高 澄編 (1535) 「夷語」『使琉球録』嘉靖 14 年本 (善本叢書本)
- 潘 相編 (1764) 「土音」『琉球入学見聞録』乾隆 29 年序汲古閣本
- 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1966) 『琉球方言の総合的研究』明治書院
- 外間守善・波照間永吉 (2002) 『定本 おもろさうし』角川書店
- 村山七郎 (1981) 『琉球語の秘密』筑摩書房
- 李 鼎元編 (1800) 『琉球訳』台湾・中央研究院溥斯年図書館所蔵朱絲欄鈔本 (台湾本)

#### 【引用・参考URL】

- 石崎博志 (2010) 「〔書評〕多和田眞一郎著『沖縄語音韻の歴史的研究』溪水社」『International journal of Okinawan studies』第 1 巻第 2 号 : 133-138  
<http://hdl.handle.net/20.500.12000/33992>
- 狩俣繁久 (2007) 「第 6 回琉球語と地名研究の可能性 (1)」ジャパンナレッジ (日本歴史地名大系ジャーナル)  
<http://japanknowledge.com/articles/blogjournal/howtoread/entry.html?entryid=12>
- 五大姓『琉球・沖縄歴史文化館』  
<http://ryukyu.town-nets.jp/intro68.html>
- 釈公相君「大島浦漂着」『唐手道』  
<http://www.tang-shou-tao.or.jp/dkousou.html>
- 戸部良熙 (年代不詳) 『大島筆記 (全)』伊波普猷文庫 (琉球大学附属図書館デジタルアーカイブ)  
<http://manwe.lib.u-ryukyu.ac.jp/d-archive/s/viewer?&cd=00030300>

付録：オーストロネシア祖語/babuy (ウィクショナリー日本語版)

<https://ja.wiktionary.org/wiki/%E4%BB%98%E9%8C%B2:%E3%82%AA%E3%83%BC%E3%82%B9%E3%83%88%E3%83%AD%E3%83%8D%E3%82%B7%E3%82%A2%E7%A5%96%E8%AA%9E/babuy>

(はしお なおかず・本学教授)